

---

# 死刻蝶

森村芥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死刻蝶

### 【Nコード】

N6382C

### 【作者名】

森村芥

### 【あらすじ】

あと一ヶ月の命だと医者に宣告された絵描きの男、千寿は7年ぶりに一年中雪の降る故郷へと帰ってきた。そこには幼馴染の汐弥があの日と変わらずにいた。

息を吐くと、眼前が白く濁った。

足を進めると地面に積もった雪がザックザクと小気味いい音を立てる。それが嫌に懐かしくて、つい遠回りをして来てしまった。

「……」

辿り着いたのは一軒の宿屋。一瞬だけ、ほんの一瞬だけ扉を開けるのを戸惑った自分がいる。けれど仕方がない、ずっと昔から決めていたのだから仕方がない……そう、死ぬのはこの地だと決めていた。

その宣告をされたのは本当に唐突だった。

しがない絵描きとしてぶらぶらと生活していたつけなのだろうか、風邪を引いたと思って行った病院で聞かされたのは信じがたい言葉。そう、それは紛れもなく死の宣告だった。

早い話が、ずっと全うな生活習慣をつけなかった俺が、酒ばかりを浴びる様に飲んでいた為に、体を患った。ただそれだけの事。内臓がどうやらかれてしまったらしく、もっても後一ヶ月だと言われる。人というのは可笑しなもので、本当に驚いたときには錯乱するか、呆けるかのどちらか……俺は間違いなく後者であった。

「……じゃまするぞ」

ガラガラといい音を立てて扉が開く。中から顔を出したのは見知った人物だった。

「……千寿？」

「ああ……久しいな、汐弥」

もうかれこれ七年は会っていないというのに、一目で分かったらしい彼女は俺の名を呆けたように呟いた。彼女の名は榊汐弥……一年中

雪が降るこの街で宿屋の女主人なんてものをやっている。

「…本当に千寿かい？あの、ぐうたらでどうしようもない千寿…」  
酷い言い様だとは思うものの、本当のことなので何もいえない。いや、むしろ汐弥のそんな言い草は懐かしさすら感じて心地がよかった。

「そうそう、そのどうしようもない濤崎千寿だ」

「…どうしたのさ、戻ってくるなんて思わなかったよ」

そう汐弥が口にするのも無理はない。俺はこの街にいるのが嫌で外の世界へと飛び出していったんだから…。

「少し野暮用でな、汐弥…泊めてくれるか？」

そうは問いかけたものの、我が家も同じ、汐弥が断りを入れるはずはなかった。

「…あんたこの雪ん中ふらふらと歩いてただろう？頭の上に雪が積もってるよ」

「ああ…気がつかなかったな」

頭の上に積もってしまった雪を汐弥は丁寧に払ってくれる。世話焼きなところは昔から変わっていないらしく、こいつはいい嫁になるな…などと思ってしまった。

「さて、外は寒かったろ？早く上がって温かいもんでも飲みな」

そんなところまで行き届いている。訂正しよう、いい嫁だけではない、優しい母親にもなる。

「…汐弥さん、傘…ありがとうございました」

廊下を曲がったところで見知らぬ少女と出会う。少女…というところと語弊があるであろうが、そう言っても差しさわりがなさそうなほど、清楚可憐に見えた。

「ああ…雪にはあたらなかった？年頃の女の子が体を冷やすといけ

ないからね」

「はい、平気です……そちらの方は？」

そう年は離れていないだろうというのに、まるで親子のような会話をする二人。会話に混じることとも出来ず余所見をしていた俺に、気がついたかのように少女が首を傾げた。

「ああ：アタシの昔なじみで濤崎千寿。絵描きをしてるんだったっけ？」

「一応な：世に出ることのないしがない絵描きだ」

いらぬ誤解を受けるのは御免だと言わんばかりに、先に忠告しておく。絵描きだと言っただけで有名だと勘違いする輩も多く、そういうのにはうんざりしていた。

「はじめまして、わたくし鳴無櫻花と申します」

礼儀正しく手をそろえ頭を下げた少女、櫻花はどこからどう見てもお嬢様そのものだった。

「ああ：しばらく世話になるんだ、よろしく頼む」

握手：などと言って手を出せば確実に首を傾げられるだろうと、俺も同じように小さく会釈する。礼儀正しく返されたことで警戒を解いたのか、櫻花が小さく微笑んだ。

「わたくしも絵を少しだけ：描いているんです。もしよろしければ、お暇なときにでもお話を聞かせて頂けると嬉しいです」

「別に構わないが：俺は有名な画家ではないぞ？」

やはりそう付け加える。変な憧れを抱かれた挙句、騙されたなどと言われてはどうしようもない。

「はい、全然構いません」

全く気にした様子もなく、むしろ話を聞かせてくれるという事のほうが大きかったのか、櫻花は一層につこりと微笑む。まあ：悪い気はしないので、それ以上突っ込むのはやめる。

「それじゃあ、櫻花：こいつを部屋に連れて行くから……」

「あ、はい：お止めて申し訳ありませんでした」

汐弥の言葉に慌てた様に頭を下げ、逃げるように櫻花は走り去って

しまった。

「ふむ、どこのお嬢だあれは…」

やはりそんな姿を見て、言葉にせずにはいられず俺は汐弥に首を傾げる。

「気がついたのかい…：相変わらず女の事だけは見てるね」

からかう様にそう口にする汐弥に他意はなく、決して嫌味に聞こえないのがこの女の強みなのだろうと思う。

「あの子はね、財閥のお嬢様だよ…：家出してきたんだってさ」

「家出ねえ…」

「まあ、あんまり聞いてやらないでくれ…：色々ある年頃なんだよ」  
かくいう汐弥もそんな初々しい時期があったのかと、記憶を思い返してみるがどうも見当たらない。人それぞれだということなのだろうと、俺は考えるのを止めることにした。

「ここがあんたの部屋だよ…：普通の客室と同じだからあまり汚くしないように」

「ああ…：分かった分かった」

生返事を返すが、それを咎めるつもりもないのか、汐弥は部屋の窓を薄く開く。外は当然のように雪が降り続けている。

「ああ、そうだ…：一杯やるかい？」

思い出したようにそう口にした汐弥。それは俺を歓迎しての事だ…：分かっているのだが、頷く訳にはいかなかった。

「いいや、酒はやめたんだ」

汐弥と共に飲む酒はさぞ美味いだろうと思うものの、我慢せざるえないだろう。

「やめた…：あんたが？」

「ああ」

「…：やっぱりどこか可笑しいんじゃないかい？ 千寿…：病院にでもい

くかい？」

病院には行ったばかりなどとは言えず、俺は苦笑いと共に首を振った。やはりどこか納得出来ないのか、心配そうな表情のまま汐弥がため息を零す。

「気にしてくれるな、大した事じゃあない」

出来る限り普段どおりの笑みを心がけてそう口にした。暫くしてやっと諦めたのか、汐弥がいつもの表情に戻る。

「わかったよ、あんたがそう言うなら信じよう……何か調子が悪くなったらいうんだよ？」

まるで母親だな……などと思い、思わず笑みが零れてしまった。

「ほら、笑ってないで……飲まないっていうなら……そうだね、お茶でも入れようか」

「ああ……そうしてくれると有難い」

本当ならば一杯やりたいのを我慢して、俺は汐弥に茶を入れてもらう。まあ、外の雪と汐弥をつまみにすれば……ただの茶もそう不味くはなかった。

「千寿さんは風景しか描かれないのですね」

話を聞かせてやるといったのがつい先日。さっそく桜花は俺の部屋を訪ねてきた。

「ああ…人を書くのはどうもな…」

特に人を書きたくないというわけではなかった。むしろ書くことと思っただけだと言った方がこの場合は正しい。俺の場合はその姿形を残しておきたいと思って筆をとる、すなわち人物はその対象外なのだ。

「桜花は人を書くのか？」

「ええ…少し…ですが」

何故か照れたように笑みを漏らす桜花の横顔を見ると、人物を書くのも良いかもしれない等と思ってしまう。それほどまでに彼女は絵に描いたような可憐さがあった。

「でも風景を描く方が好きです…と、いうよりは…風景に溶け込んだ人を書くのが好きなのです」

面白いことを言う少女だと思う。風景に溶け込むような人…白い雪の中で白い着物を着ているとか、そういうことだろうか…否、多分違うであろうから口にはしない。

「千寿さんの絵には…雪景色が一つもないのですね……」

ふと、気がついたように言葉を漏らした。桜花の言葉通り手元にあった絵には一枚も雪景色がない…いや、実際今まで雪景色なんてものは書いていないのだが…

「雪は…あまり書く気が起きんだ」

「どうしてですか？わたくしは白く儂く…無垢で美しいと思うのですが…」

無垢とは…また変わった事を言う。けれど彼女が言葉にすると、そんな気がしないでもないのは桜花自身の魅力のせいなのだろう。



「何故か昔から雪には情が移らなくてな」

俺もこの街で過ごした期間は長い。けれどもその景色を残しておきたいと思ったことは一度もなかった。

「そうなのですか……きつと描かれたら素敵でしょうに」

目を伏せそう呟く櫻花に、俺は言葉を失い頭を掻く。有名な画家ならばまだしも、俺の書いた絵などで素敵という言葉を使われるとうもしっくりとこない。

「世辞はいい」

「お世辞などではありません！ わたくしは千寿さんの描かれる絵をとても気に入りました」

素直にそんな言葉を向けられると、照れからか何も言えなくなってしまう。彼女はなんとも不思議な純粹さが滲み出ており、褒められると素直に受け取ってしまいそうになる。

「まあ気に入ってくれるのは有難いが……そう褒められると調子が狂う……」

これ以上褒め殺されてはたまらんと、俺は櫻花にそれだけいい窓の外に目をやった。後ろからはくすくすと少女らしい笑い声が聞こえるが、この際聞こえないことにする。

外は相変わらずの雪……下に目をやると、汐弥と若い娘が話をしているところだった。とは言うものの、会話までは聞こえるわけではないのだが……汐弥の世話焼き加減から見て、相当に気に入っているらしい事が見て取れた。

「……どうしました？」

窓の外を見たまま動かなかった俺を不思議に思ったのか、櫻花が同じように窓の外に目をやる。

「あの娘……見ない顔だと思ってるな」

「ああ……琳子さんですね」

そう当然のように口にした。琳子……とはまた聞かぬ名だとまた首をひねるしかない。

「千寿さんは会ったことありませんでしたね……琳子さんはこの街の

「……ええつと、遊郭で働いていらっしやるんです」

言うか言うまいか悩んだような口ぶりで櫻花は頬を染める。この程度のことで頬を染めるとは…本当に清楚なお嬢様だ。

「遊郭…それはまた可笑しな知り合いだな」

「琳子さん汐弥さんと仲がいいみたいですから」

確かに櫻花の言う通り、仲がよさそうだ。しかし遊郭などに汐弥が顔を出すとも思えない…と、いう事は他の場所でも出会ったのだろうか…ピンとこないとどうも気持ちが悪い。

「ふうむ…汐弥に聞いてみるか」

「何をですか？」

つい口に出してしまった言葉に、意味を図りかねると櫻花が首をかしげる。

「いいや、なんでもない」

当然のようにそう誤魔化すと、櫻花はさらに首を傾げるばかりだった。

「琳子というそうじゃないか」

汐弥が部屋に来た時に唐突にそう聞いてみる。特に驚いた様子もなく汐弥は顔を向けた。

「なんだ…やっぱり見ていたのか」

「やっぱりとは？」

汐弥の意味ありげな言葉に鸚鵡返しで問いかけると、彼女独特の薄い笑みを浮かべ窓のほうを見やる。

「琳子がその窓から誰か見てる…って言ってたからね」

その言葉に思わず納得してしまう。ほかの場所を見ていないようにあの琳子という娘はそれなりに周囲を見ているらしい。

「遊郭で働いてるとか…珍しい知り合いだな」

話の糸口をつかめたと、俺は聞きたかった本題へと入っていく。無

論当然のようにそれを分かっていた汐弥は、窓の傍に腰掛けて俺に目を向けた。

「そうだねえ：あの子とはかれこれ三年ほどの付き合いかな、雪の中薄着で立ち尽くしていたから声をかけちまったんだよ」

「薄着で？こんな寒いのか：」

と言うのも、部屋の中でさえ上着を脱ぐことを躊躇ってしまうほどにこの時期になると寒い。年中雪が降るような場所なのだから、当然と言えば当然なのだが、ついそんな事を思ってしまう。

「：自殺でもしようかと三時間も悩んでたらしいよ」

その言葉に俺は目を丸くしてしまった。窓から見た琳子は明るい元気な娘と言うイメージがあり、とてもじゃないがそんな事をするような娘には見えなかった。

「ずっと遊郭で育つたらしいけどね：好きでもない男に操を捧げたくはなかったんだってさ：」

「ほう：古風な娘だな」

思わずそんな言葉。汐弥の叱咤が飛んでくるかと思ったが、そんなつもりはないらしく薄い笑みを浮かべたまま窓の外に目を移した。

「男のあんたには分からないだろうけどね：：女っていうのはそういうもんさ」

「多少の違いはあれど：か？」

揚げ足を取るつもりは毛頭ないのだが、遊郭のような場所で働く女を全て否定するようで申し訳がなかった為でた言葉。

「ああ：でも好きになった男に初めて抱かれる時は、例え他の男に抱かれた後でも誰もが処女だとアタシは思うけどね」

にこりと綺麗な笑顔を見せた汐弥の言わんとする事が、理解できたような出来ないような：：そんな中途半端な気持ちで釈然としないけれどこれ以上、汐弥に問いかけても答えは教えてくれんだろう。

「まあ気になるなら、今度話してみるといいよ」

そう言って汐弥は立ち上がり俺の横をするっと通り抜けて部屋を後にした。

日が完全に落ちた後、俺はぼうつと外の景色を眺めていた。この街を出て行くときに見た白い雪と、今外で降っている雪がまるで別物に見える。不思議なもので、今まで一度も書きたいと思わなかったこの景色を、残しておきたいと思った。

「……最後の一枚は雪景色か……悪くない」

おそらく最後になるであろうその絵が、死に場所と決めたこの地の風景。それも中々に面白いと思う。思うが早いか俺は筆を手にある景色を描き始めていた。

「雪景色…書かれ始めたんですね」

そう俺の部屋で口にしたのは櫻花だった。きらきらとした笑顔で絵を見つめながら独り言のように問いかけてくる。

「…ああ、なんとなく」

「完成楽しみにしてます」

そう一層笑顔を増して顔を向けた櫻花に、どうも調子が狂ってしまった。どうも櫻花には人をほだす能力があるらしい。言葉だけの世辞など本気にしなかった俺がこうして本気にしてしまうのだから…

「そういえば櫻花…絵を描いているといったがそういう勉強はしているのか？」

何の気なしに問いかけたその言葉に、櫻花はかすかに表情を曇らせる。問いかけるべきではなかったかと一瞬ためらわれたが、すぐに顔が上げられたことに俺は案著した。

「勉強は…していません。というよりは父が許してくださらないのです」

その言葉に櫻花が家出をしてきたという理由がわかった気がする。絵書きなどという不安定な職に娘をつかせたくない親心か…それともただの世間体の問題か…

「何度もお願ひしたんです…けれど許してはくれませんでした。それどころか勝手に婚約者まで決めて…」

話すうちに熱が入ってしまったのか、櫻花は目に涙をためて何かに耐えるように言葉が続けた。これまで櫻花は自分の本当にやりたいことには手を出せずに生きてきた娘なのだろう。

「耐えれなかったんです…だから、家を出たんです」

「そうか…」

返事はそれしか返せなかった。当然といえば当然…彼女の痛みが分かるのかと言われれば、自由奔放に生きてきた俺にはさっぱりわか

らない。彼女のような不自由のない生活がうらやましくもあり、自分自身の自由さがありがたくもなる。

「けれど私は諦めていません：やりたいことも出来ない人生なんて死んでいると同じです」

そういう櫻花に俺は相槌を打たなかった。やりたい事ができずに生きていく人間も、死んでいく人間も多くいる。それを知らぬ櫻花はやはりただの箱入り娘だった。

「千寿さんは絵を描くのが好きなんですよね？」

話を切り替えるようにそう問いかけてきた櫻花にもう暗い影はない。「：どう、だったかな」

「好きでは：ないんですか？」

はつきりしない俺の返事に、戸惑ったような表情を浮かべる櫻花。はじめは好きで始めたような気がする絵書きの仕事も、今ではそれほどはつきりと言えなくなっていた。

「例え趣味の範囲で好きだとしても、それが仕事になってまで好きでいられるかとは違うみたいだな」

それだけ答えて視線を窓の外に向けた俺に、櫻花はそれ以上問いかけようとはしなかった。それは俺の言わんとすることが分かったせいか、それともただ言葉が出なかったただけかは分からない。それでも、わけも分からず問いかけられるよりずっとよかった。

その夜、いつものように汐弥が俺の部屋に来て話相手になってくれた時、ふと顔を伏せた。

「千寿……絵を、描き始めたんだね」

問いかけはそんなものだった。だから俺は普通に頷いて返事を返す。  
「…あんた、雪は書かないって言ってなかったかい？」

そういえば、と思い出す。汐弥には昔そんな事を言ったかもしれない。理由は何だったか…俺の記憶からは消えていたが…

「言ったかもしれないな、どうしてそんな事を聞く？」

汐弥の意図が分からず、俺はいつもと同じ様子でそう問いかけるが、汐弥は視線を絵に向け暫し黙り込む。けれどいつまでもそうしている訳にもいかず、汐弥はゆっくりと口を開いた。

「雪にはいい思い出がないから…って言ったじゃないか…、雪は大切な人を奪っていくものだからって…」

汐弥の言葉に、俺はその記憶を思い出す。俺の両親は幼い頃に死んだ…その日も当然のように雪が降っていた。この街で暮らしていたのだから当然といえば当然。ただ俺にはどうしても忘れられなかった…母が雪の下から死人となって発見されたその日の事が…。俺の母親は昔から体を患っていて、一人では歩くのも困難だった為で、きる限り目を離さないようにしていた筈だった。けれどその日母は黙って出かけ、帰ってはこなかった。後に人伝に聞いた話では、母は父の墓参りに行っていたそうだ。

「子供だったというだけだろう…母が死んだのは病のせいだ」

淡々と口にした自分自身の声が酷く冷たいものだと思いついたのは、口に出してからだった。

「そりゃそうかもしれないけど…あれだけ雪を嫌っていたあんたがさ…」

「久々に見るとそう嫌なもんじゃないさ…儂くて…」

そう、櫻花の言葉を借りるならそれは無垢だった。白くはらはらと舞い、人の手の上でそっと溶ける。儂くて美しい…まるで人の命だ。

「変わってないと思っていたら…変わっちゃったね千寿は…」

どこか寂しそうに口にした汐弥に、俺は目を丸くする。どこか変わってしまったように見えるのだろうか…自分自身ではどこも変わっていないと思っていたのだが…

「昔のあんたはふらふらしてて、そのまま何も言わずにどこかに行ってしまったけど……」

その言葉に反論はない。確かに昔から汐弥にそう何度も言われた記憶すらある。

「今のあんたはそのまま消えちまいそうだ」

泣いているのかと思った。その声がいつもの汐弥からは想像もつかないほど小さく、頼りないものだったせいだろう。けれど視線を向けた先の汐弥は顔を伏せているだけだった。

「馬鹿なことを……消えるわけではないだろう」

そう言った言葉は思いのほか自信のない声になってしまう。医者から言われた期限は刻々と近づいてきている。しかもそれは長くて……という条件付。短ければいつ死ぬかも分からないのだ。

「……そうかい、あんたがそういうなら……信じるよ」

その言葉に小さく胸が痛んだ。汐弥に話してしまおうかと思うが、そんな事をしてどうなるとも思う自分がある……もう助からないと分かりきっている人間の死を教えられ、苦しむのはきつと汐弥だ。

「汐弥……お前はいい女だな」

生まれてから唯一その全てを好んだ女、汐弥は俺にとってそんな人物だった。この感情を友情と言うには浅すぎて、愛情というには安っぽすぎる。

「……千寿はいやな男だね」

そう返ってきた汐弥の返事には悪意はなかった。自賛かもしれないが、汐弥も俺との関係を気に入ってくれていると思っている。

「いい女にいやな男……丁度いいじゃねえか」

その言葉はすっかり日も落ちて暗くなった夜空に溶け込んでいった。隣に座る汐弥の頭が俺の肩に乗せられる。その微かな重みと温かさがただ心地よかった。



気がつくと日が傾いていた。

朝はいつも通り起きたはず：今日は櫻花が訪ねてこなかったせいか、いつの間にか眠っていたらしい。寝ぼけたままの頭を起こすように体を持ち上げて、頭を掻く。

「…もう四日か…」

ここに来てもう四日も過ぎたのだと今更ながらに思い出した。医者  
に宣告をされた日から数えれば、もう一週間は経っているだろう。  
あの日、医者に死を宣告された時、別段将来に希望もなく、家族や  
恋人もいない俺にとって、そう嘆くことでもなかった。やりたいこ  
とも無く、ただ毎日同じように日が昇って落ちて：その繰り返しだ  
った。その生活に意味すら無かった。

「……」

きつとここに帰ってこなければ俺が死んだ事を知る人間すらいなか  
っただろう。自分はその程度の価値しかない人間だと分かっていた。  
そんな事を今更ながら考えると自嘲を帯びた笑みが浮かぶ。

不意に視界の端に映った描きかけの雪景色。今更こんな絵を描いて  
何になると思う自分がある、最後だからこそ書き続けたいと思う自  
分もいる。死をもう受け入れた自分がある、死を受け入れられず理  
解できない自分がある。

「怖いのか」

自問に答えはでない。恐怖を感じているにしては心は落ち着いてい  
た。きつと心を支配しているのは恐怖ではない：けれどそれが何な  
のか俺には分からない。

「千寿：いるかい？」

不意に部屋の外から控えめな声かけられる。声からして恐らくは  
汐弥だろう。思うが早いか、答えるよりも早く体が動く、扉を開け  
ると返事を待っていたであろう汐弥が俺に向かって顔を上げた。

「どうした？」

「起きたんだね、昼間寝ていたから：早めにお腹が減ったんじゃないかと思ってね」

薄く笑みを浮かべた汐弥に、俺は目を丸くして頭を掻く。言葉から察するに、昼間に一度部屋を訪ねられたらしい。全く気がつかなかった自分に呆れつつも、声をかけない汐弥も人が悪いと思う。

「そうだな、言われてみれば腹も減った」

「じゃあ用意するよ、少し待ってな」

言葉を終え、踵を返そうとした汐弥の手をとる。驚いたように振り替える汐弥と眼が合うが、自分自身どうしてそんな事をしたのかよく分からない。

「千寿…？」

「ああ：いや、なんでも無い」

慌てて手を離すが、汐弥は黙って俺に視線を向けたまま固まっていた。こうも見つめられては、少しばかり居心地が悪い。だからと言ってかける言葉も見当たらず、暫く互いに沈黙が続く。

「すぐ戻るよ」

優しく微笑み、沈黙を破ったのは汐弥だった。一瞬その笑みに目を奪われて惚けてしまい、言葉を失った。

思いもしなかった。否、今まで気がつかなかったと言うほうが正しい…汐弥が綺麗な女だと言う事に…

言葉通り、汐弥はすぐに食事を持って部屋に戻ってきた。その間も

俺は汐弥をじっと見つめてしまう。一度自覚してしまった事を無かった事にするのは酷く難しいのだと今更に知らされた気分だった。

「…どうかしたのかい？」

「いや、なんでもない」

間髪いれずに返事は返すが、その視線は宙を泳いでしまった。そんな様子を不思議に思いながらも、汐弥はやさしい笑みを浮かべると、俺に食事と茶を差し出す。

「頂きます」

「どうぞ」

何だか、昔もこういった会話を何度かしたことがある気がする。勿論気がするだけではなく、事実あるのだが：

昔、母が死んだ年：母以外身寄りがなかった俺は、汐弥の家に引き取られた。息子として引き取られたわけではない、どちらかといえば居候に近かった。汐弥の両親は優しくて面倒見がよく、いつも俺に対して「出世払いでいい」なんて言葉を漏らしていた。けれど：そんな事もできぬまま、汐弥の両親は病で死んだ。

「美味しいな」

汐弥の両親が死んだのは汐弥がまだ：十七の時だ。それから暫く、俺は汐弥と二人生活していた。けれどそれはたった二年だけ：俺は自分が二十歳を超えると、すぐにこの町を飛び出した。

ああ：その時汐弥は、どんな顔をしていただろう。

「…なんだい？」

不意に顔をあげてしまい、汐弥と目が合った。その表情には俺とは対照的に笑顔が浮かんでいる。

「…汐弥、お前は」

言いかけて、言葉が詰まった。何をどう聞こうというのだろうか：俺の傍にはずっと汐弥がいてくれた。両親が死んでも：寂しいと思ったことなどなかったはずだ。でも俺はどうだ？汐弥が寂しいと思うとき、傍にはいなかったんじゃないか？

まだ十九だった汐弥を一人この町に残して：俺はこの町から逃げた。

まるで辛い事しかなかったかのように：

「千寿？」

「…あ」

かけられた言葉と同時に、汐弥は俺の顔を覗き込む。

「どうかしたのかい…？ 顔色が悪い…」

いつどんな時でも、きっと汐弥は相手の心配しからない。だからこそ、誰か一人だけでも…その背中を支えてやらなきゃいけなかったんじゃないのか…

「ああ…大丈夫だ」

すまない、なんて言葉は喉の奥に引っかかって出ては来なかった。

今更…自分に何かをする時間がなくなってから気がついてしまった。今まで一番近くにいて、一番大切にしなければならぬものを、蔑ろにしていた自分に…もう何も出来ないというのに…

「最近…無理してるように見える」

「…俺がか？」

呟くように汐弥がもらした言葉に顔を上げると、少しだけ悲しげな笑みを浮かべた顔が視界に入る。

「昔はあんなにのんびりしていたのに…今は早く早くって…急いでるように見えるんだよ」

その言葉に間違いはなかった。俺にはもう時間がなくて…あんなに長いと思っていた人生の先がないんだ。

「そんなに急がなくなったっていいじゃないか、折角帰ってきたんだ…またのんびりしなよ」

そう言って照れた様に笑った汐弥は、まるで少女のようだった。

少しだけ後悔してしまう。俺にはもうのんびりすごす時間もなくて、きっとその時がきたら汐弥を悲しませるだけだというのに…どうして今ここにいるのかと…

「ああ…そうだな」

けれど、思いとは裏腹に、口から出てきた言葉はそんなものだった。



夜が明けた。

窓を開けると目に移ったのは、見慣れたとばかり思っていた雪景色だった。後どれだけ、この景色を見ていられるのかとそう考えて、すぐに窓を閉める。

「…何を今更」

そんな当たり前の事実を確信しているのかと…笑いたくなった。なただけで笑いなんて出ては来なかったのだが…

『折角帰ってきたんだ…またのんびりしなよ』

汐弥の言葉がその顔と共に思い返される。汐弥の顔は本当に嬉しうだった。俺はもう帰って来ないと思っていたのだろう。当然だ、この街に嫌気がさして、出て行ったのだから…

「……」

じゃあどうして…どうして今更帰ってきたのか…

死ぬ場所はどこだと決めていた。そんな自分勝手な理由で…また汐弥を苦しめようとしている。

「…駄目だよな」

自分に言い聞かせるように出てきた言葉はそれだった。このまま汐弥の傍にいればきつと俺は苦しくない、辛くない、怖くない…でもそれだけだ。俺には先がないから…今だけ幸せならそれでいい…でも汐弥は違う。これから先もずっとずっと…生きていくんだ。

思い立つが早いか、俺は荷物をまとめ汐弥のいない宿場を後にした。荷物といっても鞆ひとつに収まる程度しか持ってきてはいない。その中身もほとんどが自分の絵に関するものだけだった。

小さなため息が出た。それだけで目の前が白く濁る。体の芯から冷えていくような寒さだったが、手持ちの金もそう残ってはいなかった。普段は茶店なのだろう閉められた軒先を見つけ、椅子に被

った雪を掃って座る。

(：ちよつと拝借)

そう心の中で頭を下げ、ポツンと傍らに置いていかれたのであろう傘を手にとった。これでどうにかこうにか雪は凌げる。

しかし、これからどうするかは考えの先がない。いつまでも同じ場所でジツとしていては、俺がいないことに気がついた汐弥に見つかってしまうかもしれない。それはどうにか避けたかった。

だからといってこの街に他の宿場などなく：否、合ったとしてもそんな金は工面できない。いくらなんでも一晩こんな場所にいては凍え死んでしまう。

「何してはるん？」

どうしようかと頭を悩ませていたところに、その姿はひょっこりと現れた。

見覚えのあるその顔を頭の中で思い返してハツとした。以前汐弥と話しているのを見たことがある女性。名は確か：そう琳子だ。

「こんなところに居はったら、風邪ひいてしまいはるよ？」

からかう様に柔らかく笑う琳子。

「それもそうなんだが：どうにもこうにも路頭に迷ってしまったてな」そんな事を真顔で言うと、琳子は目をぱちくりさせてしまう。どうやらあまりに真剣に言った為、真に受けてしまったようだ。

「お金：もってらはらへんの？」

「ないな」

「そう：困りはったね：こんな寒い中一晩過ごしたら風邪どころか、ほんまに死んでしまうよ？」

心配そうな表情を向ける琳子に、思わず苦笑いを返してしまう。『死んでしまう』その言葉が今は何故だか身近に感じられなかったからだ。琳子という女性の持つ雰囲気のせいかもしれない。

「今死ぬのも：後で死ぬのもそう違いはないさ」

ぽつりと零したその言葉に、琳子はまた目を丸くした。

「後で死ぬって：？」

素直に問いかけられて、どうしようか一瞬悩んだ。けれど俺と汐弥の関係を知らない琳子から、すぐにその事が知れることはないだろうと思ひ直す。否、本当は…琳子から知れてもいい気がしていた。自分の口から今更知らせるより、ずっと気が楽でいい。

「…病気でな、もうすぐ死ぬんだ」

初めて人にそんな事を話したな、と思いながらため息に似た吐息が漏れた。

「だから…自殺、でもしはるん？」

不意に顔を上げると、泣きそうな表情が目映った。

「……」

「あかんよ…自分から死ぬなんてあかん…」

言うが早いか、琳子は俺の服の袖を引っ張って、歩き出した。女性の力だからそう強くはない。抵抗しようと思えば出来たが、そうはせず、その背に黙ってついていくことにした。

琳子に手を引かれ、たどり着いたのは一軒の家だった。

「入って」

小さく言われるがままに、家の中へと足を踏み入れる。今まで人がいなかったのだろうから、家の中と言えども少しばかり寒い。それでも外よりずっと暖かった。

「あがってええよ、そこらへんに座って…着替え用意するから」

言うが早いか、琳子はそそくさと部屋の奥へと行ってしまった。恐らくは言った通り着替えを用意してくれているのだと思う。

「……」

部屋の中は質素…と言ってしまってもいいのだろうか、そんな状態だ



った。察するに琳子の家だと思うのだが、女性の一人暮らしにしては見栄えするものがない。

「はい、用意……どうしはったん？」

奥から舞い戻ってきた琳子が、座りもせず部屋を見渡している俺に、疑問の色を見せた。

「いや、なんでもない……」

あまり折り入ったことを聞くものではないかと思い、すぐに首を振る。

「そう……これ着替え……そんな格好でおりはったら風邪ひきはるで？」

「ああ……すまない」

琳子の手から男物の着替えを受け取る。

はて……この家に彼女以外の姿……まして男など見かけないのだが……どういう事だろうか？

そうは考えたものの、そのまま考えに耽るわけにもいかず、琳子に言われるがまま部屋の奥で着替えることにした。

着替え終わって部屋に戻ると、琳子が食事の用意をしている所だった。

「あ、着替え終わりはった？服は：よかった、小さくはないみたいやね」

ほっとした様に笑う琳子に思わず笑みを返してしまう。

「そうや、お名前：まだ聞いてへんかったね」

「ああ：俺は濤崎千寿だ」

思い出したように、俺もそう琳子に自己紹介をする。

「えらい変わったお名前：一度で覚えれるわ」

何故か楽しそうに笑う琳子に、やはり疑問を感じてしまう。見知らずの人間：それも男を自分の家に引っ張ってくるというのはどういうことなのだろうか：

「ああ、うちも自己紹介しとらんかったね。琳子：そう呼んでくれはったらええよ」

予想通りの名前に小さく返事を返す。

「変な女や：そうおもてはりますやろ？」

返事を返したつきり黙りこんでしまった俺に、そう言葉をなげかけた。

「変：：？」

「見知らずの男を家に引っ張ってきて、なんも無かったみたいな顔してるから」

それは確かにそうだと思うが、やはり口にはしない。変：：というよりは変わっていると思う程度だ。

「そうやね：千寿はんも、もうすぐ死ぬんやって告白してくれたことやし、うちも話とこかな：聞きたくなかったら聞き流したって：うちも千寿はんに先がないって分かってるから話すんやし：」

小さく漏らした声は、少しだけ元気がなく、その顔もいつの間にか

下を向いていた。

「うちな：小さい頃、親に売られて今遊郭で働いてるんよ：小さい頃はお客取るわけやあらへんし、別に気にもしてへんかった。それに：」

悲しげだった琳子の表情が少しだけ優しく微笑む。

「好きな人もおったんよ：優しくて、いつも泣いてたうちを慰めてくれた：せやから頑張ろう：そう思えた。勿論いつの頃からか将来遊郭で働くって言う事の意味も分かるようになった。それはどう頑張っても変えられへん：覚悟はいつか出来るようになってた：：はずやった」

小さくため息を漏らした琳子は、そっところらに視線を移す。

「：？」

「千寿はんは：好きな人おりはるん？」

そう不意打ちのように聞かれて、言葉を失ってしまう。好きな人と聞かれてもとっさには出てこない。

「ふふ、なんや悪い事きいたみたいやね：気にせんとったって」

笑う琳子に思わず頭を掻いてしまう。どうにも調子を崩されてしまうようだ。

「いざとなったら怖あなってんよ：せやからうちも：死のうかと考えたことがある」

そこまで言われてようやく汐弥が話していた、彼女は自殺をしようかと考えていたことがあった話を思い出す。

「でもとある人に止められてん：自分から死ぬようなことしたあかんって、好きな男がおるなら尚更：それが全てやないからって：」とある人というのはおそらく汐弥の事であろう。世話焼きなところは昔から変化がないらしい。

「だから死ぬんは止めにした。別に言われた言葉に感銘を受けたわけやないけど：なんやろなあ、その時のその人の姿が：少しだけ自分と重なって見えたんかもしれへん」

どんな顔をしていたのか、俺には全く見当もつかない。けれど恐ら

く、琳子にそう思わせるほどに哀しげに見えたのだろう。その理由が自分自身などと自惚れた事は言わないが、それでも一端を担ってしまっていたならと、言葉が出てこなかった。

「けどな…結局その恋は終わってしもた」

あっけらかんと笑う琳子の姿が少しだけ痛々しい。当の本人はもう気にしていないかもしれない。案外とあっさり忘れ去っているかもしれない。それでもその顔を直視することができなかった。

「あんなに好き合って、あんなに幸せやったのに…：ほんまに些細なすれ違いで壊れてしもた」

人の気持ちなんてそんなものなのかもしれない。辛い事があるからこそ幸せを幸せと感じられるというのに、ずっと幸せでありたいなどと傲慢なことを思うのだ。だから擦れ違い、傷つけて、別々の道を歩む。

「あはやね…誰も傷つけへん恋なんてあれへんのに、どっかでそれを期待してた」

きつと、傍にいるぶん一番相手を傷つけるのかもしれない。それでも幸せが勝っていたならば、その関係は続くのだろう。

「本当に…とんだ阿呆だな」

まるで絶望にでも打ちのめされたかのような顔をして、悲劇を自分の盾にして、もう嫌だからと逃げ出した。与えられた優しさと哀しみを天秤にかける事すらせずに、全てに蓋をした。そのくせ窮地に立たされて、哀しくなればその優しさを辿るんだ。

「自分のことしか考えられていない、そんな余裕すらないのか…」  
知らず顔を伏せる。今更だと思ひながらも不甲斐無さに腹が立つ。  
どうして優しく出来ないのか、どうしてもっと思慮深く行動出来ないのか…いつも傷つける間際にしか解らない。

「そんなん、しゃないよ…」

ふわっと甘い香りに包まれる。気がつけば琳子に抱きしめられていた。背中に回された手は添えるように、頭に触れた手は優しくその髪を撫でる。まるで小さな子供を相手にしているかのように。

「怖いやろ、死ぬんわ……余裕なくてええんよ、喚いたってええんよ、死にたないんやもん」

そっと抱きしめる手が離され、両手で顔を包まれる。優しい笑みを浮かべたその顔と目が合い、言葉を失ってしまった。

「泣いて、喚いて、怒って……それで最後は……幸せだけ感じたらええんよ」

につこりと微笑まれたかと思うと、静かに口付けされる。どうしてもそんな事をしたのか琳子の本心は定かではない。それでもその人の温かさに酔ったように、琳子の背に腕を回す。

「変な女や……そうおもてはりますやろ？」

聞くのは二度目のその言葉。思わないといえは嘘になった。だから今度は正直に答える。

「そうだな……見知らずの男に体を許していいのか？」

少しでも気が変わったならば止めるつもりでいた。けれど返されたのはやはり同じ笑顔。

「見知らず？自己紹介はったやろ？もう知らん人やあれへんよ」  
当然のように口にして、それからもう一言。

「……泣きそうな顔してはる」

そっと細い指が髪を掠める。その手をとって口付けてみた。視線だけを向けると、こういう扱いには慣れていないのか、少し照れたような年相応な少女っぽい笑みが返される。

「慰め……か、そう悪いもんじゃないな」

そんな風に思ったのは初めてだった。今までは慰めなんて煩わしいだけのものだと思っていた。

「そうとも言い切られへんよ……ほんまは慰めてほしいんかもしらへん」

直感的に嘘だなと思う。それでも悪い気はしなかったのだから……それでいい。

「勿体ないくらい……ええ男やと思うんやけどなあ」

小さく笑った琳子を抱きしめて、口付ける。

外は手先が悴む様な寒さ。暖くなり始めた部屋の中でも熱く感じるほどに、琳子の肌は暖かった。それを感じながら頭の隅によく知った顔が思い浮かぶ。それははっきりと解ったというのに、掻き消すように俺はもう一度琳子を抱きしめた。

気がつけば日は高く上り、琳子の姿はなくなっていた。

体を起こして、寒さに身震いする。出かけに琳子がかけてくれたのであろう毛布を手繰り寄せ、辺りを見渡す。

（ああ：そうか）

そこでやっと思い出したように息をついた。

女と夜を共にするのは初めてでもなければ、経験が少ないわけでもない。だというのに夢でも見ているかのような余韻が残っている。

これも琳子という娘の持つ雰囲気のせいだろうかと考えるが、すぐに止めた。深く気にするようなことではない。

頭を切り替えて服に袖を通す。まだ寒さが身にしみるが、それはこの街では致し方ないことであつた。不意に傍にある机に目を向けると、琳子が用意していったのであろう食事が用意されている。どうしていいものかと少しばかり頭を悩ませるが、すぐ傍に書置きがあるのに気がついて手を伸ばした。紙には小さな線の細い柔らかな字が躍っている。

『遠慮せずに食べて下さい。荷物は玄関に置いておきますが、無理して出かけない様に』

目を通して思わず目を丸くする。最後の一文：無理して出かけない様に、それはまだここにいてもいいと言う事なのだろうか。全てが全て予想外なわけではないが、やはり驚いている自分がいる。

けれどそれ以上深く考えていても仕方がない。とりあえず言葉に甘えて食事をいただく事にした。

さつさと食事を終えて、俺は玄関へと足を運ぶ。別に出て行くつもりではなく、荷物を取りにきただけである。琳子の置手紙通り、玄関には荷物が置かれていた。それを手に部屋まで戻り、俺は中から書きかけの絵を取り出す。

「……」

取り出したはいいものの、どうしようかと首を傾げてしまった。描きかけの絵、これは汐弥の宿の窓から見た景色なのである。記憶で埋めることも出来なくはないが、それは俺が今まで書いてきた絵とは大きく趣旨がずれてしまう。それをよしとするかどうか……。

悩んだのはほんのわずかな時間。戻ることが出来ないのだから、そうするしかないと思い直した。この街の景色だけならば記憶の中に腐るほどあるのだ。

筆を手に一瞬だけ固まる。汐弥は今どうしているのだろうか……、俺がいなくなる事などいつもの事だと興味も亡くしているだろうか。そこまで考えて置手紙をしてくるべきだったと後悔する。全て今更の事なのだが……

「……汐弥」

知らず呟いたその名前が酷く遠いものに感じた。

日も暮れに暮れた深夜。その姿は帰ってきた。

「千寿はん？」

驚いたような声に振り返ると、予想通り琳子の姿が目に入る。軽く手を返すと、すぐ傍まで歩み寄ってきて腰を下ろす。

「起きてるなんて思わへんかったわ……それ、絵？」

「ああ……これでも一応しがない絵描きだったんだよ」

返事を返して筆を置く。琳子はまじまじと絵を見つめている。そんな珍しいものでもないと思うのだが、琳子の目は興味津々とばかりに輝いていた。

「おどろいたあ……こんな才能がありはってんなあ」

笑う琳子につられるようにして思わず笑ってしまう。暫く絵と俺に交互に視線を向けた後、琳子はまっすぐ俺に向き直る。



「千寿はん、人は描きはらへんの？」

櫻花もそんな事を聞いていたなと思ひ出す。

「…いや、書かないわけじゃないが…どうしてだ？」

疑問の色を返すと琳子が少しだけ照れたように笑みを浮かべた。

「いやあ…もし描いてもええっていわはったら、うちも書いてほしいなあ…なんて思ったんよ」

おずおずとそう口にした琳子に一瞬言葉を失う。もっと腕のいい絵描きに頼めばいいだろうに…そうは思うが言葉として出てこない。あまりに素直に目を向けられるものだから、思わず頷いてしまっていた。

「別に…簡単にでいいなら、いいぞ」

そんな気のない返事に目を輝かせた琳子。

「ありがとう、ちょうど明日はお休みもろたし…今日はもう遅いから寝よ」

そう言うって手を引かれる。確かにこのまま話を続けていれば日が昇ってしまいそうな気配がした。だから言われるがまま身を任せる。

「嫌やあらへんかったら…一緒に寝えへん？温かそうやし」

不意の琳子の言葉に思わず目が点になるかと思った。同時に不思議な事を聞くともある。琳子は綺麗な顔をしているし、体型も理想的だと思われる。だというのにその自信の無さはなんなのか…

「その誘いを断る男がいるのか、俺としては疑問なんだが…」

素直に思ったまま言葉にしてみると、今度は琳子が目を丸くしてしまった。首をかしげていると、暫くしてからその手が引かれる。逆らわずにすぐ傍で腰を下ろすと、琳子がぎゅっと手を握り締めた。

「変わったお人やね…うちはさっきまで、誰とも知れん男に抱かれとったのに…嫌やと思わへんの？」

その言葉に「ああそうか」などと思ってしまう。琳子の自信のなさはそのこれから来るのだとも理解できた。

「大して…昨日の夜と何一つ変わらんと思うんだが？」

言って昨日と同じように琳子の手口に口付ける。照れたように笑った

その顔は、やはり年相応な娘のものだった。薄く笑みを返すと、琳子が抱きついてくる。

「嫌やわぁ…なんでこんな、温かいんやろう」

「抱き合ってるからだろう」

なんて返事を返せば、胸の中から琳子の可愛らしい笑い声が聞こえてきた。その後小さく「そやね」という返事。そのまま二人して倒れこんで横になる。

「こんな温かい思たんは久しぶり…」

呟いて琳子は目を閉じた。それに返事は返さず俺も目を閉じる。昨日とは違う人の温かさを感じながら…

翌朝、ほぼ同時に目を覚ました俺と琳子は、まるでそれが当たり前かの様に一緒に朝食を終え、片付けを手伝い、食後の茶を飲む。ゆったりとした時間だった。

「そんなら、約束どおり絵を描いてくらはるんやろ？」

笑みを向けられ俺は頷く。今の今まで人を全く書いたことがないわけではないが、前に書いたときには自分には合わないものだと感じていた。だからそれから全く書いていない。絵描きになってからと考えるならば：これが初めてだった。

そう時間をかけて描くわけではないのだからと、気をはらないで紙と筆だけを手にする。琳子はそれを黙ったまま見つめていた。目を向けると当然の様な笑みが返ってくる。全体を通せば綺麗に見える琳子だが、その一部ずつは子供のようなあどけなさを残していた。くりっとした目、小さな唇、丸みを帯びた輪郭、短く切られた髪、その全てが相まって綺麗だと思わせた。

「ひとつだけ聞いてもええ？」

それは小さな声だったが、筆の音以外雑音のない部屋でははっきりと耳に届く。視線を上げると琳子が小さく目を伏せる。

「千寿はんは、なんでこの街へきはったん？」

そういえば琳子にはここが故郷だとは言っていなかった事を思い出す。ためらったのは一瞬、すぐに返事を返していた。

「ここは俺の故郷だからな：二十歳の時に出て以来一度も戻ってこなかった：だから、最後ぐらいはここで過ごそうと思ったんだ」

「：家族は、おらへんの？」

「ああ：ずっと昔に死んだ」

短く切った言葉に返事はなかった。たいていの人間は聞いてしまったことに侘びをいれる。だから少しだけ違和感を感じた。けれどその違和感は嫌なものではない。むしろ心地いい。

「帰ってきても一人やのに……戻ろうおもはったん？」

「……」

一人じゃなかった。戻れば汐弥がいる……その確信があった。だから戻ってきたのかもしれないと今更に思う。

「誰か……おりはるんやね」

その声はほっとしたため息にも似ていたが、どこか寂しそうでもあった。

「なんで……その人の所へいきはらへんの？」

その問いは出て行けというものではなく、本当に純粹な疑問だった。「最初は、そいつのところに行ったんだ。それでいいと思って……だが数日たって、どうしてここににいるのかと疑問に思った」

「……」

「そいつは自分より他人を優先するような奴で、俺が死ぬとわかれば辛い思いをさせるだろうという事は分かっていたはずだった。だ……というのに、どうして俺はここににいるのかと……だから出てきたんだ」  
どれ程沈黙が流れたのかは分からない。静かにそれを破ったのは琳子。

「その人のこと……好きなんやね」

顔を上げると、やさしい笑みが目に映った。何一つ辛いことなどないというのに、なきそうになる。

「好きで、大切に、傷つけたくないから……だから自分が寂しいても、出てきはったんやろ？」

ゆっくりと傍まで歩み寄ってきた琳子が傍で膝をつく。小さな両手が、俺の手を包み込む。

「絶対に来るって分かってる別れは怖い。そやけど、それを伝える事がその人を悲しませる事かは別なんやないかな？」

それは誰に向けた言葉だったのか……琳子自身に対してだったのかもしれない。

「別れの時は悲しくて、辛くて、泣き暮れるけど……出会ったこと、過ごした時間、貰った温かさ、それは全部忘れはせんし、後悔もせ

えへん」

丸い目が顔を覗き込んでくる。

「死ぬまでに、何か残せるんとかやいます？」

その目がにっこりと閉じられ、包み込む手に優しく力がこめられた。残せるもの…たった一つでもいい。汐弥に残せるものがあるのだとすれば…

「俺は…返してやりたいんだ」

ずっとずっと汐弥から貰っていた、貰い続けていた優しさと幸せを…ほんの少しでもいいから、返してやりたい。

「これから先も、笑ってられるように…」

ただ幸せそうに笑う顔が見たい。そうしてずっとそれが続けられるように、汐弥に幸せを感じてほしい。

「もどらな…あかんね」

汐弥の元に…そうしてもう一度一から始めよう。あの日、この街を出てきた時から切れてしまった糸を結びなおして、あの頃のように笑えるように…

「その人…お名前なんて言いはるん？」

琳子の何気ない疑問。俺は一瞬だけそれに戸惑った。琳子と汐弥は顔見知りで、俺と汐弥の関係…それが琳子にとって心情的に複雑なものだと察したから。

「千寿はん？」

どんな顔をすればいい？琳子にどう伝えればいい？

正直にありのままを話すか？汐弥を想いながら琳子を抱いたのだと…

「琳子…お前はいい女だな」

「…？」

本当にそう思った。汐弥という女が俺の傍にいないければ、俺は本気で琳子を気に入っていただろう。

「…すまない」

何か、もっと何か言葉にしようと思った筈なのに、喉から出てきた言葉はそれだけだった。

「…ああ、そうや」

不意に琳子が思い出したように声を漏らし、柔らかな笑みを浮かべた。ふわりとした華のような微笑み。

「千寿はん…あの時、窓からうちと汐弥さんを見てはったお人やね」  
そんな言葉に思わず顔を上げた。あんな些細な事を覚えていたのかと思う。そんなに記憶に残るような事だっただろうか？

「変な顔してはる」

琳子が呆けた俺の顔を見てクスクスと少女のように笑う。

「不思議ですか？うちが覚えてるの」

「…ああ」

素直に言葉に頷くと、琳子はまた笑った。

「覚えてますよ…だって、あの時一瞬で分かったんやもの…」

「このお人が、汐弥さんの想い人やて」

雪が降り続く中を、俺と琳子は殆ど会話も無しに歩いた。吐く息は目の前を白く曇らせ、手や足先は寒さで悴んでいる。

「……」

真っ白な雪を見ていると、ほんの数日前にここへ帰って来た時の事を思い出す。

素直に懐かしいと感じた故郷。七年ぶりに再会した汐弥は、自分勝手にここを出ていった俺を、あの時と何一つ変わらず出迎えてくれた。『さて、外は寒かったろ？早く上がって温かいもんでも飲みな』

まるで少しの間だけ出かけていただけかのように、何の蟠りもなく汐弥は笑った。だから……

『このお人が、汐弥さんの想い人やて』

琳子の言葉を聞いた時、声が出せなかった。一欠けらもそう思っていなかった訳じゃない。ただ、第三者から聞かされたその言葉の重さに打ちのめされただけだ。

——千寿……アタシがいるから……

記憶の中にある汐弥は、いつも笑っていた。

——アタシはずっといるから……

でも本当は、いつだって泣いていたのかもしれない。

——アタシが……

二十歳になって、俺は自分が決めていた通りにここを出る決意をした。それを簡単に汐弥に告げたのは、町を出る前日だった。

汐弥は一瞬驚いたような顔をして、それから何とも言えない顔で「どうして？」と聞いた。

その問いに俺は「ここが嫌いだから」と答えた。

汐弥は笑うでもなく、泣くでもなく、ただ静かに「なら、しかたないね」と呟いた。

ただそれだけで終わってしまった会話。それは別れの朝も同じだった。ふらりとすぐそこにでも出かけるように「じゃあな」と言った俺に、汐弥はいつもの笑みを浮べて「いつてらっしゃい」と返した。

あっさりとしたそれに、別れなんてこんなものかと思った。

だから町を出るまで一回も振り返らなかった。だから本当は知らないんだ、汐弥がその時どんな顔をしていたか…どう思っていたのか…

——いかないで…

あの時、振り返っていたら…俺の足は止まったかもしれない。

——おいていかないで

何かが…変っていたかもしれない。

けれどそれはもう昔の話で…今更どうすることもできないのが現実だ。だからこそ俺は今ここでこうしてるんだとも思う。琳子と並んで歩いて、宿に辿り着いたら汐弥はまた笑うんだろうか？何事もなかったかのように「おかえり」と言うんだろうか？

「千寿はん」

不意にかけられた声に俺は振り向く。先程まで隣にいたはずの琳子が数歩後ろに立っていた。

「琳子？」

「うちとはここでお別れ…一人で戻らはって」

優しく笑った琳子の言葉の意味はすぐに理解できた。琳子は汐弥に何も言わないつもりなのだ。俺の事も何一つなかった事にするつも



りなのだ。

「うちの命の恩人やから…」

だから、ここから先へは進まない。

「汐弥はんを…頼みます」

そう言って琳子は深々と頭を下げた。そんな彼女の姿に、俺も頭を垂れる。声には出さないが「ありがとう」と、そう心で呟いた。

暫く独りで歩いて、そこへ辿りついた。

恐らく俺が今一番安らげる場所。一番大切な女がいる場所。俺の最期の場所。

「……」

ふわりと舞う雪の中で、その姿を目にする。頭の上に積もった雪が、どれほどの時間そこにいたのかを物語っている。まるでここへ戻ってきた時の自分のように…

―なあ、待っているのか？

居ても立っても要られず、知らず足早に駆けていた。

――待っていたのか？あの時も…

その姿が俺に気が付くよりも少し早く、それはその場に辿り着く。

「汐弥！」

呼ぶと同時にその体を抱きしめた。

「千、寿…？」

戸惑ったような小さな声。その声が微かに震えているのに初めて気が付く。体は冷え切って冷たくなっていた。どうして今更…こんなに愛しくなるのか自分でも分からなかった。

「汐弥…」

抱きしめる腕に力が籠る。今更ながらそれを口にする事が躊躇われた。けれどそれでは何も変わらないのだと思い直す。

「汐弥……お前が好きだ」

そうして、その思うよりずっと細い体を抱きしめながら、そう言った。

「……」

言葉を失った汐弥を、俺は黙って抱きしめ続けた。懐かしくて、息が詰まって、言葉が上手く出てこない中、まだ『あの言葉』をいっていなかった事を思い出して口にする。

「ただいま」

雪の中で『ただいま』と口にした俺に、汐弥は一瞬の沈黙の後「おかえり」と返してくれた。

本当に些細な事なのだが、何故かそれで酷く安心した自分がいる。そのままの状態ですっと汐弥を抱きしめていたら、汐弥が困ったような、安心したような顔を向けてきた。

「二人揃って風邪でも引く気かい？」

「別に：お前とならそれもいいぞ」

ふざけて返事を返したら、今度は少しだけ怒ったような顔を向けて汐弥が溜め息を吐く。呆れたか？なんて思ったのもつかの間で、すぐに優しい笑みを向けてきた。

「アンタに風邪なんて引かれたらアタシが困る」

言葉と共にそっと頬に触れた汐弥の指は寒さのせいか、冷たくなっている。けれどそれは全く不快じゃない。

「やっぱりお前はいい女だな」

冷たく添えられた手に自分の手を重ねて、そんな言葉を口にする。別段意図はなく、自然に出たものだった。

「アンタはやっぱり嫌な男だよ」

自嘲気味に笑った汐弥は、途端泣きそうな目をして顔を伏せた。

「勝手に出て行って：勝手に帰って来て：」

自分でもそう思う、自覚している。

「アンタをずっと待ってたアタシが馬鹿みたいで：」

あの日からずっと七年間も汐弥は俺を待っていた。それは俺が頼んだ訳ではないが、本当は心の何処かで望んでいたのだろうと思う。

「おかえり：千寿」

そうでなければここに帰ってきたりはしない。そうでなければ汐弥を思い出したりしない。

そうでなければ：たったその一言で泣いたりなどするものか。

優しい笑みを浮べた汐弥は泣いていた。どうしてこんなにも時間が掛ってしまったのかと思う。

もっと早く自覚すれば良かったのだ。素直にその温もりを心地良いと感じれば良かったのだ。

そうすれば：こんな風にすれ違わなかった。

「俺は本当にどうしようもない馬鹿だから：お前を悲しませた」

あの日、汐弥がどんな顔をして俺を見送ったのか、どんな気持ちで七年間も過ごしていたのか：知らずに俺はのうのうと暮らしていた。

「その上、今の俺にはお前に何かしてやれる時間もないんだ」

思うよりずっと、その言葉は簡単に口に出せた。もっと躊躇われるかと自分自身思っていたのだが、どうもそうでもなかったらしい。

「時間がない：？」

ゆっくりと顔を上げた汐弥から笑みが消える。不安そうなその表情に胸が痛んだ。

「ああ：汐弥、俺はな：もう長くはないらしい」

きつともう後数週間の命。それを分かっているながら、その明確な期間を口にする事だけは躊躇われた。

何故かは自分でも分からない。

「千寿：アンタ：」

察しの良い汐弥のことだ。その一言で全てを理解してくれたに違いない。面倒な説明をしなくて言い分、気が楽だった。

「だから戻ってきたんだ：」

どうしてと聞かれれば、最初はただこの場所だと決めていたからだと答えていただろう。でも本当は：

「お前に会いたくなって戻ってきたんだと思う。お前が好きだから一瞬、泣きだしそうな顔をした汐弥は黙って顔を伏せた。そのまま俺の胸に頭を押し当てる。

「千寿：死ぬんだろ？」

「ああ」

問いかけに短い返事を返すと、汐弥が俺の服を握り締めた。

「頭では分かっているんだけどね：どうして今更って：だけど…」  
俺の服を堅く握り締めていた手が放され、汐弥が顔を上げる。俺の好きな優しい笑みだった。

「嬉しいよ：アタシはずっと千寿が好きだったんから」

呟くようにそう口にした汐弥に、触れるだけの口付けをする。特別な感情を持って汐弥に触れたのはそれが初めてだった。

「死ぬと分かっている俺でもいいのか？」

そんな必ず来ると分かっている悲しみをお前は受け入れるのか？

「関係ないよ：だってこの世にアンタは一人だ」

俺が、俺だから汐弥はそれでいいという。

それは俺が琳子では駄目だと思ったのと同じなのだろうか？

「汐弥：俺はお前に何が出来る？」

俺が死んでまた一人になっても、汐弥には笑っていて欲しいと思う。だから、何か出来る事があるのならばしてやりたかった。

「なにも：しなくていいよ」

返された返事は予想外のものだった。

「アタシにとっては千寿が今こうして帰って来てくれた事が、何より嬉しい事だから」

けれどそれは、俺がいなくなったら終わってしまうのではないのか？と声には出せなかった。

「それでもどうしてもって言うなら、一つだけあるよ」

不服そうな顔をしている事に気が付いたのか、汐弥が「しかたがないな」という顔をしながら、言葉を続けた。

「その一つって言うのはなんだ？」

たった一つしか望みがないなんて、無欲にも程があると思ってしまったが、汐弥は元々そういう女だった。だからそれについては何も言わずに聞き返す。

「アタシを：抱いて欲しい」

少しだけ頬が紅潮していたが、その表情は柔らかいものだった。真っ直ぐと目を向けた汐弥を抱きしめて、雪の中で二度目の口付け

をした。

数日ぶりに戻ってきた部屋は、出ていった時と何一つ変らない状態のままだった。

日が落ちて、夜になった後、俺はその部屋で汐弥と肌を重ねた。口付けをして、白い肌に手を滑らす。まるで少女のように照れた笑みを浮べる汐弥の白い肌は、少しずつ紅潮し、汗を滲ませた。

「千寿…」

不意に名前を呼ばれる。俺の好きな、安心する声だ。名前を呼ばれるたびに、まるで返事のように口付けをした。

どうして今までそう思わなかったのか不思議なほど汐弥が愛しくて仕方なかった。

俺が求めれば汐弥は受け入れてくれる。

ただそれだけの事が…酷く嬉しくて、同時に哀しくて、気が付けば泣いていた。

「千寿」

汐弥の指が優しく俺の頬に触れ、涙を拭った。どうして泣いてなんているのか、自分自身が一番聞きたかったが、汐弥はその訳が分かっているかのように微笑む。

「千寿が思う程、アタシは弱くないよ」

汐弥が口にしたのはそんな言葉だった。その言葉で俺も理解する。

「汐弥：好きだ、お前が好きだ」

きつく細い体を抱きしめたら、優しく背中 hands を廻された。

「アタシも：好きだよ」

耳元で囁かれた声を聞いて、俺はまた汐弥に口付ける。

何度も何度も、飽きる事なく汐弥を抱きしめた。

微かな肌寒さに目を覚ますと、すでに日は昇っていた。

汐弥はもう起きたのだろうかと隣に目を向けると、まだその姿はそこにあり、穏やかな寝息を立てて眠っている。

その姿を見て、やっぱり汐弥は綺麗だ、などと思ったのもつかの間、すぐにハッとした。

もうとつくに日は昇っていて、普段であれば汐弥は起きている。否、起きていなければならぬ時間ではないのかと言う事…

あまりにも穏やかな寝顔で、起すのは忍びなかったが、そうも言うてられないだろう。

「汐弥…朝だぞ」

その体を静かにゆすれば、案外あっさりと汐弥は目を開けた。

「おはよう、千寿」

ふわりと微笑んだ汐弥に慌てた様子はない。ただ少しだけ辺りを見渡してから…

「初めて寝坊した」

なんて笑みを俺に向けた。

目が覚めたばかりだと言うのに、手早く身支度を済ませた汐弥は俺をおいて部屋を出ていった。

汐弥はこの宿の主なのだから仕方がないとは思うのだが…何もする事がなくなってしまった俺は、そのまま二度布団に転がり込んだ。まだ眠いのかもしれない。そんなボーッとした頭ながら考える。

俺が汐弥に自分の口から告げた「時間がない」と言う言葉について、汐弥は深く聞いては来なかった。

理由は…分かる訳もなく、何となく聞かれなくてほっとした自分が



いる事に呆れていた。余り話したくはない。話すとそれが事実なのだと嫌でも確認させられている気分になる。

(…だから聞かなかったのか…)

自分の事だと言うのに、いつも汐弥の方が俺の事を理解している気がした。

事実そうなのだとも思う。だからこそここまで愛しく思ったのだろう。

(後どれだけ残されている?)

答えのない自問自答が頭の中で繰り返された。

残された短い時間の中で、どれだけの時間を汐弥と共にいられるのかも考えた。

「……」

暫くまどろんで、俺は起きあがった。

忘れてなどいない、俺にはもう時間がないのだ。まどろんでいる時間すらも惜しい。

簡単に身支度を整えて、俺は書きかけの絵を取り出した。

純粹に絵が好きだった頃の様に、一心不乱に筆を取り描き続けた。

俺がここにいた証を、汐弥と過ごした時間の証を残す為に：

その日は気が付けば日が暮れていた。

朝からずっと絵を描き続けていたのだ。途中汐弥が顔を見せ昼飯を置いていった気がする。

無論、今俺の腹が減っていないと言う事は用意された昼飯は食べた……であろうが、あまり記憶にない。

恐らくは意識が別に傾いていたせいだろうとは思う。

「あーっ」

ぐっと背伸びをして、そのまま倒れ込んだら、頭上に汐弥の顔があった。

「そんな勢いよく転がったら、頭を打つよ」

呆れたように笑いながら汐弥は俺の傍に腰を降ろす。

「仕事はもういいのか？」

「夕飯時がすぎれば、そんな急がしいもんでもないさ」

自然と口をついて出た疑問を予感していたかのように、汐弥がよどみなく答える。

「それよりも、朝からずっと絵をかいていたのかい？」

汐弥が視線を移したのは、今まさに俺が書いていた雪景色だった。

「ああ……まだ完成してはいないが」

言うと同時に起き上がって、同じ様に絵に視線を向ける。ずっと考えている言葉がある。いつか桜花が言った『風景に溶け込む人』の事だ。

俺の生まれ育った雪景色……その景色が一番似合うのは、やはり汐弥ではないかと思う。

（初めてだな……人を書きだと思ったのは）

声には出さぬがそう自分を笑った。こんなにも綺麗な女が側にいたと言うのに贅沢な話だ。

「優しい絵だね……」

薄く微笑みを浮かべながら汐弥は呟く。

「優しい？」

「優しくて綺麗だ：でもなんでだろうね、どこか儚い…」

そう言った汐弥は俺の肩に頭を乗せた。寄りかかったその重みが心地良い。

汐弥には分かっているのかもしれない。まだ確かに言葉に出来ない絵に込めた想いを：

「汐弥：好きだ」

汐弥の手を取って、その体を引き寄せ口付けをした。

ただ側にいるだけだというのに、その温もりを感じただけだと言うのに、抱きしめたくなる。

その想いに対して軽すぎると分かっている言葉を紡がずにはいられなくなる。

「アタシも好きだよ：アタシは千寿じゃなきゃ駄目だ…」

そっと離された唇から呟くような声で汐弥は囁く。そしてすぐに再び口付けをした。

どうしていいのかわからないんだ。

愛しくて、離したくなくて、もっと伝えたい言葉があるのに：俺も、汐弥もその術を知らない。

だから抱きしめる。出来うる限りの愛しさを込めて、俺はその細い体を抱きしめる。それしか想いを伝える術を知らないかのようにだった。

翌朝、目が覚めて隣で眠る汐弥の穏やかな寝顔を見て安心した。

まだ側にいる事ができるのだと：

窓の外に視線を向けるが、まだ夜は明けていない様で、少しだけ薄

暗い空が目映った。昨日の二の舞にはならなかったかと少しばかりほっとした。

（綺麗だな…）

ぼーっと汐弥に視線を移してそんな事を思う。

俺の記憶の中にあつた汐弥はまだ少女だったというのに…いや、少女は言い過ぎか…

「お前だったら…嫁の貰い手なんて余るほどあつただろうに…」

昔から綺麗だった…今思えば汐弥は昔から整った顔立ちをしていた。だから恐らく、二十歳を越えた辺りから引く手数多だった筈だ。

うぬづかれかもしれないが、汐弥が誰も決まった相手を見つけないのは、俺を待っていたからなのかと思う。

不謹慎ながら、少しばかり優越感を感じずにはいられなかった。

もし俺にまだ時間があつたならば…こんなにも汐弥を愛せているなら…共に歩む人生を選んでいたかもしれない。

その言葉を汐弥に告げていたかもしれない。

「汐弥…」

名を呼ぶ、それ以上の言葉は出てこなかった。

「千寿…？」

ゆっくりと目を覚ました汐弥が俺の名を呼ぶ。それだけで息が詰まりそうになる。

「まだ朝じゃないぞ？」

「…そうみたいだね」

まだ薄暗い部屋の中で笑いあう。なんてこと無いこの時間がずっと続けばいいと思う。けれどそれは不可能だ。

もう時間は限られている。だというのに…

「千寿…」

汐弥の優しい指が頬に触れた。

「無意味なことかもしれないけど…アタシは…」

その手が肩にかけられ、汐弥が寄り添ってくる。

「千寿と結婚したい」

「……」

思いがけない言葉に文字通り固まった。どう返事をしているのか判らなくなる。

「そんな顔されると困るよ…別に本当に結婚式を挙げたいなんて言ってない」

「どういうことだ？」

儀式としてのそれを望んでいないのならば、何を望んでいるというのか…

「ただ繋がりが欲しいだけ…千寿がアタシを愛してくれたんだって言う…証が欲しいだけ…」

俺が生きた証を、汐弥との時間の証を残そうとしていたのと同じように、汐弥も俺との証を望んでいた。

すぐそこに…別れがあると判っているからこそ強く望んでしまう。

「…愛してる、結婚しよう」

望まれるなら、俺はそれを汐弥に与えるだけだ。汐弥が俺にずっと与えてくれていたように、俺はそれを返すだけだ。

「ありがとう…千寿」

優しい笑みを浮かべながら汐弥が泣いていた。その涙を止めたくて、汐弥を強く抱きしめる。

どうしようもないその現実に、胸の奥が軋んだ。

たった二人きりの薄暗い部屋の中、まるで子供の遊びの様な誓いをした。

たいした言葉はなく、ただ二人で向き合って、口付けする。それだけだ。

生憎と指輪なんてものは持ち合わせていなかったから、それはまた後日ということになる。

なんとも適当な形の誓い。それでも俺と汐弥にとっては十分だった。形なんてどうでもいい、相手とその気持ちさえあれば、他はどうだって良かった。

たった一度きりの触れるだけの口付けが、特別なものに感じる。

これが汐弥の望んだ繋がりになればいいと思う。この想いだけは死ぬまで変わらない。

—死んでも…変わらない—

朝が来て、汐弥が部屋を出た後、俺は再び書きかけの絵に向き直って筆を取る。

思い描くのは記憶に残る姿。まるで幻のようにぼやけた視界の様な記憶の中で、鮮明に残る姿。

その筆が止まることは無かった。

まるで残された時間が本当に僅かになってしまったかのように必死だった。

その筆が止まったのは、数日後の日が暮れ始めた頃…

あの夜、形さえも曖昧になってしまったのだから、せめて汐弥に指輪ぐらいやるべきだろうと思う。しかし困ったことにそんな大層な持ち合わせも無い。

「…あ」

うんうん一人で唸っていたが、不意に思い出したように俺は自分の荷物を漁る。

俺がよほどの馬鹿で無い限り無くしてはいないはずだ。少ない荷物全てをひっくり返すような勢いで漁ってやつとの思いでそれを見つけ出した。

手の平に乗ったのは、少しだけ古ぼけてしまった指輪。

それは唯一の母親の形見でもあり、両親の結婚指輪でもある。それを手にして、汐弥に贈るのならばこれしかないと思った。

そんな古ぼけた指輪は嫌だと怒るだろうか？形見なんて嫌がるだろうか？

「…そんなわけ無いな」

自分でその考えをすぐに否定する。

きっと汐弥はいつもの優しい笑みでそれを受け取るんだろう。

汐弥なら、それを本気で喜んでくれるんだろう。その確信がある。思いながら知らず笑みが零れていた。そういう女を俺は好きになったのだと今更ながら思う。

その指輪を握り締めながら、俺は今し方完成した絵に視線を向ける。

描いたのは、雪景色と…愛しい女。

白と薄い鮮やかな青、舞散る雪の中で一人待ち続け佇む女、その姿は雪の中に溶け込むようだった。

この古ぼけた指輪と完成した絵が…俺の証になるんだろう。

「なあ…汐弥」

書き終えた絵のすぐ傍に指輪を置いて、俺は座り込んだ。

窓の外からは降り注ぐ雪が見える。

それを生まれて初めて綺麗だと思った。

最後の最後まで…汐弥に色々なものを与えて貰った気がする。

その優しい笑みが、優しい声が、優しい言葉が、どれだけ俺を救ってくれたかわからない。

それを少しでも返せたなら、後悔は無いんだ。

証を残せていたなら…汐弥が笑ってくれるなら、他に何もいらぬ。

「汐弥…俺は……」

まるで睡魔に襲われているかのように、瞼が重くなる。

こんなにも穏やかでいられるのは、汐弥が傍にいたからだろうと思う。

本当は言いたい言葉があったんだ。けれどそれは叶わないんだと知る。

だからどうか、せめて泣かないで欲しい。

泣く必要なんて無いんだ、絶望する必要なんて無いんだ。

伝えたい言葉は…そう……



名を呼ばれた気がした。

振り返るけれど当然その姿はあるわけも無い。

「千寿…？」

どうしてか判った。それが虫の知らせというものなのだとすれば、なんて残酷なのだろうかと思う。

「――っ」

訳もわからず駆け出していた。不安が心を駆り立てた。知らず目からは涙がこぼれていた。

「汐弥さん？」

いつもと変らぬ様子で廊下を歩いていた少女が、少しだけ驚いたような声を上げた。けれどすれ違ったその姿には目もくれず、汐弥は駆け抜ける。

少しだけぶつかった肩が嫌に痛かった。でもそんな事は気にもならない。

辿りつくなり勢いに任せて部屋の扉を開けた。

窓が開いているせいなのか部屋の中は少しだけ肌寒く感じる。静かな物音一つしない部屋。

「千寿…」

窓の傍で目を閉じるその姿を見つける。

その瞬間、瞳から涙があふれ、零れ落ち、押し殺していた筈の声が喉の奥から漏れた。

何を思うよりも先に体が動いた。

駆け寄って、その体を抱きしめる。もう二度と抱き返してはくれないその腕を握り締めた。

「っ千寿…せん、じゅ…」

溢れ出した涙が止まらない。

胸が軋む、体が震える、どうにもできないそれが現実なのだと…そ

の体を抱きしめて知った。

もう二度と目を開ける事はないのだ。

笑いかけてくれる事も、抱きしめてくれる事も、もう二度と…帰って来てはくれない。

どれだけ待っても貴方の帰ってこないこの世界に意味があるのかとまで思った。

そんな中、ぼやけた視界の端に写った一枚の絵に目が奪われた。

それは紛れも無い…あの日の記憶の姿。

待ち続けたあの日々、その想いは伝わった。

だからこうしてここに証が残っている。その想いも温もりも…無駄ではないのだ。

この証に意味が無いわけは無いのだ。

そう、あの日…千寿はここに戻り、言ったはずなのだ…ただいま、と……

だから汐弥が返す言葉は決まっていた。

「…おかえ、り」

あれから数ヶ月の時が経った…

今もまだ汐弥はあの宿にいる。これからもそれが変わる事はないだろう。

たった数ヶ月しか過ぎていないその場所で、何か特別な変化が訪れる訳もなく、平凡に…静かに時は流れていった。

変化があったとすれば、些細な事が三つ…

ひとつは琳子…

「汐弥はん、これはここでええのん？」

首だけを汐弥の方に向け、両手一杯の荷物を持って問い掛けたのは琳子だった。

「ああ、そこで構わないよ」

それを確かめてから琳子はその両手一杯の荷物を床へと置いた。

琳子の姿は少しだけ変っていた。元よりそう派手ではなかったものの、やはり遊郭で働くかなりの化粧をしていたが、今のそれは打って変わった様に地味なものだった。

「思ってたより肉体労働やわぁ」

その場にへたり込むように座り、琳子は笑う。それに汐弥も優しい笑みを返した。

今、琳子は汐弥の宿で働いている。遊郭で働いていた筈の琳子が「雇ってくれ」と来た時は、正直汐弥も驚いた。

遊郭はそう簡単に止められるものではない。ずっと幼い頃から育ててもらった恩を返さなければならぬ場所である。それこそ一生をかけて…

だからさすがの汐弥も聞かずにはいられなかった「どうしたのか」と…

詳しい事を琳子は口にしなかった。ただ一言だけ、『土下座して、お金は一生かかっても払いきるから…辞めさせてくれって頼んだんです』と言って笑った。

どうして今更それを選んだのか…その理由だけは聞いてくれるなど、琳子の目が訴えていたから、汐弥はそれを聞かなかった。

ただ静かに頭を下げた琳子に「いいよ」と手を差し伸べた。

「汐弥はん…」

「なんだい？」

呟くような琳子の声に汐弥は首を傾げる。

「うちは汐弥はんに感謝してるんよ…だから、一生かけて返すから…」

その目は汐弥には向けられていなかった。じっと足元だけを見つめている。

「そんな事なくていいよ、琳子は琳子の為に生きな」

穏やかな柔らかい声で返事が返され、琳子の頭を優しい手が撫でた。その優しさが琳子にとっては痛い。汐弥が知らぬ裏切りを心に閉じ込めてしまった故の痛み。

「ごめんな…」

これからもずっと仕舞い込む。琳子は知っていたから…事実を知っても、汐弥が同じ様に笑うだろうと言う事を…

だから優しく微笑む汐弥の隣で、想いを閉じ込めて、口を閉ざして…声を精一杯殺して泣く事しか、その時は出来なかった。

もうひとつは櫻花：

数ヶ月間もの間家出をしていた櫻花だったが、ある日突然に思い立ったように家に戻ると口にした。

けれどそれは思いつきでもなんでもなく、櫻花がずっと考えていた事だった。

「わたくしは：好きな事が出来ない人生なんて無意味だと思っていました」

宿を出る時、櫻花は可憐にはにかみながら汐弥にそんな言葉をもらした。

「そんな意味のない人生は嫌だと、わたくしはずっと自分の全てを拒み続けてきました」

自分にはどうして自由がないのかと、どうして思う通りに生きてはいけないのかと：ずっと思い続けてきた。

「でも：それはただの言い訳でしかないと、ここに来て、琳子さんや汐弥さん：それに千寿さんを見ていて、気がつきました」

自分の望まない人生を今まで歩むしかなかった琳子。

ただずっと待つしか出来なかった汐弥。

やっと大切なものに気がつけた時にはもうすでに時間を失っていた千寿。

それは、櫻花が否定し続けていた『望まない姿』のはずだった。けれどいつからか、その姿が綺麗だと思えた。それは：

「皆さんが必死に今を生きて、それを大切にしていたから：」

「櫻花：」

この宿にはじめて訪れた時の沈んだ顔が嘘のように、櫻花は晴れやかに笑った。

「ちゃんと：戦ってきます」

自分の思いを遂げる為に、はじめて櫻花は自ら一步を踏み出す。危なっかしく、手探りながら、ゆっくりと進んでいくと決めた。

「…がんばりな」

汐弥が優しく頭を撫でると、櫻花は嬉しそうに目を細める。

「いつでも…帰って来て良いから」

もし躓いても、ここに帰る場所はあるから…その言葉に返す言葉は決まっていた。

「いってきます！」

もうひとつの些細な変化…それは汐弥。

千寿がいた部屋に飾られた一枚の絵、それをじっと見つめる汐弥の指には古ぼけた指輪が嵌められていた。

「知らせなきやいけない事があるんだよ」

他に誰もいない部屋で呟く。穏やかな声で、優しい目でその絵に語り掛けるように…

「千寿がアタシを愛してくれた証…もうひとつ増えたんだ」

薄い笑みを浮べたままの汐弥の目には涙が浮かんでいた。そっと指輪が嵌められた手がお腹に触れる。

「ここに…小さな命があるんだ、何より大切な証があるんだ…」

愛しそうに、慈しむように汐弥はお腹を撫でた。

大切な…何にも変えられない愛の証。

「千寿…アタシはもう、大丈夫みたいだ」  
にっこりと笑う。

あの日からずっと、心に穴が空いたようだった。自分の一部を失ったようだった。

それが…新しい命と出会って埋まった。

これから、笑っていられると思う…

この、愛しい貴方が最期に残した優しい愛の証がある限り

## 14（後書き）

これにて完結です。

後書き：と言うほどのものでもないですが、少しだけ：

この話は私が一年ぐらい前に書き始めたもので、ずっと記憶の片隅に置き去っていたものです；

思い出したようにここ二ヶ月ぐらいで残りを書き上げてしまいました。そのせいかかなりお見苦しいものに：それでもずっと書きたかった話ではあるので、完結できてよかったなあと思います。

絶対に死ぬという事が決まっていて、なおかつ自覚している主人公というのは実は初めてでした。

何を思って死ぬまでを行動するのか：思い悩みながら、恋愛については自分の恋していた時の思いを振り返りながら（笑）書かせていただきました。

少しでも何か感じていただけたなら幸いです。

さて、この話は千寿と汐弥の話なのでこれでお仕舞いですが、本当は琳子と櫻花の話もちろんとあったりします。

ですがそれはまた別の機会があれば：ということで：

ここまで読んで頂いた皆様に感謝を込めて：



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6382c/>

---

死刻蝶

2010年10月9日21時17分発行